

都市史図集



都市史図集編集委員会編

彰国社

*Printed and published by
The Kinokuniya Company
Tokyo, Japan*

まえがき

今日の建築学は、これを単体として学ぶだけでなく、集団としての都市あるいは環境を知り、また研究することがこれまでもまして重要になっている。また建築学にかぎらず、都市あるいは環境の名を冠した学部や学科も多くの大学にできている。この図集はこうした社会的ともいえる要請の一環として、諸外国の都市を歴史的、相対的に比較する資料として編集されたものである。

本書のフレームは、空間的には、できるだけ広く世界の都市を対象に、時間的には、これもできるだけさかのぼって古代から現代までの都市を濃縮して編集するという広範なものである。有史以来人間は、必ず都市をつくり、そこで生活してきた。大げさに考えれば人類の歴史そのものの遺構を考えることになって無数の都市が対象になる。しかしそれは限られた紙面であるからできる限りの簡便な紹介で、委細は別の書物などで調べてもらうほかはない。それでもガイドの役割は十分果たすことはできるだろう。

この図集の企画は、実は今から20数年前に一度試みられている。建築史家の伊藤ていじ先生から、若い人が中心になって編集すべきであるというご宣託があり、しばらく作業が続いたが、アジアの情報でつまづいた。当時われわれの得ていた情報は欧米中心のものばかりで、膝元のアジア編がとんとおぼつかなかったのである。今日の研究者のアジアの都市調査を考えると隔世の観がある。そんなことから編集の先生方を煩わせただけあって、アジアの都市情報としては世界でも初めての図集ができたのではないかと思う。

こうした書物のもつ一つの問題は、都市のどのような断面をとらえるかである。都市には時代の盛衰はあるが様式があるわけではない。世界を代表する都市の多くは幾つもの時代の層が重なっている。したがって、いくつかの都市については複数の頁をあててその形成・変化を詳述している。またいま一つの問題は都市史と都市計画史の関係である。今さら言うまでもないことだが、都市計画の歴史は産業革命以後の社会的諸問題とその対処方法として成立してきた経緯を論ずるのが一般的であり、大学の講義などでもわざわざこれを都市及び都市計画史として論議しているケースもある。しかし、都市としての物的な経緯からすれば、生活体としての美的な遺構がいたる所にみられるのである。したがって本書は、これらの区別をあまり明確にせず、もっぱら研究等に必要とおもわれる頻度にしたがって都市を選定し、これをできるだけフィジカルに解るように心がけている。ただ、こうした歴史の流れにはエポックがある。あるいは一つのフィルターをかけて比較してみたい視点もある。そんなものをテーマとして8箇所の見開きがつくられている。単なる教科書的な知識のみならず、現代における都市問題や、景観、町並み計画、災害からの復興など今日的な課題に対する方策のきっかけもつくりたいと考えたからである。都市計画や都市デザインを研究する諸氏や学生は、是非本書を教科書としてあるいは研究のガイドとして手元においていただきたいと願っている。

目次

- 日本(古代)
 - 2 都城の空間
 - 3 国府と城柵
- 日本(中世)
 - 4 平安京の中世都市化
 - 5 鎌倉・奈良・平泉
 - 6 在地町場と港町
 - 7 寺内町
 - 8 戦国城下町
- 日本(近世)
 - 9 城下町[1] 城下町の構造
 - 10 城下町[2] 城下町の展開
 - 11 城下町[3] 城下町の景観
 - 12 城下町[4] 城下町の周縁
 - 13 三都[1] 京都
 - 14 三都[2] 大坂
 - 15 三都[3] 江戸
 - 17 港町
 - 18 生産と流通の在郷町
 - 19 門前町・宿場町
- 日本(近現代)
 - 22 明治の東京計画
 - 23 居留地と北海道
 - 24 復興計画
 - 25 郊外住宅地と学園都市
 - 26 宅地開発とニュータウン
 - 27 都市再開発
 - 28 歴史的地区の保存
 - 29 博覧会とテーマパーク
- 東アジア
 - 32 朝鮮半島
 - 34 明以前の中国都市[1] 秦～前漢までの中国都市
 - 35 明以前の中国都市[2] 後漢～元までの中国都市
 - 36 中国江南近世の都市
 - 37 中国北方近世の都市
 - 38 北京
 - 40 中国近代都市
 - 41 上海
 - 43 香港
 - 44 中国東北地方およびサハリンの都市
 - 46 台湾

- 東南アジア
 - 50 ヴェトナム
 - 51 カンボジア・フィリピン
 - 52 タイ
 - 53 ビルマ(ミャンマー)
 - 54 マレーシア・シンガポール
 - 55 インドネシアの王宮都市
 - 56 インドネシアの交易都市
 - 57 インドネシアの植民都市
- 南アジア
 - 60 古代インド都市遺跡
 - 61 宗教都市
 - 62 伝統的都市[1] 北インド
 - 63 伝統的都市[2] 南インド
 - 64 イスラーム都市[1] ムガル朝の帝都
 - 65 イスラーム都市[2] ムスリム諸王国の王都
 - 66 ヒンドゥ都市
 - 67 デリー
 - 69 新都市の設計
 - 71 ネパール・カトマンズ盆地の都市
- 中央アジア
 - 74 中央ユーラシアの都市
- 西アジア
 - 76 古代都市遺跡[1] 古代前期
 - 77 古代都市遺跡[2] 古代後期
 - 78 イラン
 - 79 トルコ
 - 81 イエメン
 - 82 シリア
 - 83 イラク
- アフリカ
 - 84 北アフリカ古代都市
 - 85 北アフリカ中世・近世都市
 - 87 アフリカ植民都市
 - 88 南アフリカ共和国
- 南ヨーロッパ
 - 92 ローマ
 - 94 イタリア古代都市遺跡
 - 95 フィレンツェ
 - 96 ヴェネツィア
 - 97 イタリア海洋都市

- 98 イタリア丘上都市
- 99 イタリア平野都市
- 100 イタリア・ルネサンス都市
- 101 イタリア・バロック都市
- 102 古代ギリシアのアゴラとエーゲ海の自然発生型都市
- 103 古代ギリシアの計画都市
- 104 スペイン・ポルトガル
- 西ヨーロッパ
 - 108 パリ
 - 110 フランス古代・中世都市
 - 111 フランス計画都市
 - 112 オーストリア・スイス
 - 113 ドイツ中世都市
 - 114 ドイツ計画都市
 - 115 ドイツ居城都市
 - 116 ベルギー
 - 118 オランダ
 - 119 ロンドン
 - 120 イギリス中世都市
 - 121 イギリス近世・近代都市
- 東ヨーロッパ
 - 122 クロアチア・ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ
 - 123 ポーランド・チェコ・ハンガリー
 - 124 ウクライナ・ロシア
- 北ヨーロッパ
 - 125 デンマーク・フィンランド・スウェーデン
- 北アメリカ
 - 128 スペインの植民都市
 - 129 フランスの植民都市
 - 130 フロンティアの開拓都市
 - 131 アングロサクソンの植民都市[1] ボストン
 - 132 アングロサクソンの植民都市[2] フィラデルフィア
 - 133 ニューヨーク
 - 134 首都建設とバロック都市
 - 135 シカゴと都市美運動
- 中・南アメリカ
 - 136 先住民族の都市遺跡
 - 137 大航海時代の植民都市
 - 138 中南米の計画都市
- オーストラリア
 - 139 オーストラリア

図版解説

- 159 日本(古代)
- 161 日本(中世)
- 166 日本(近世)
- 176 日本(近現代)
- 183 東アジア
- 198 東南アジア
- 206 南アジア
- 217 中央アジア
- 219 西アジア
- 227 アフリカ
- 233 南ヨーロッパ
- 246 西ヨーロッパ
- 261 東ヨーロッパ
- 265 北ヨーロッパ
- 266 北アメリカ
- 274 中・南アメリカ
- 277 オーストラリア

コラム

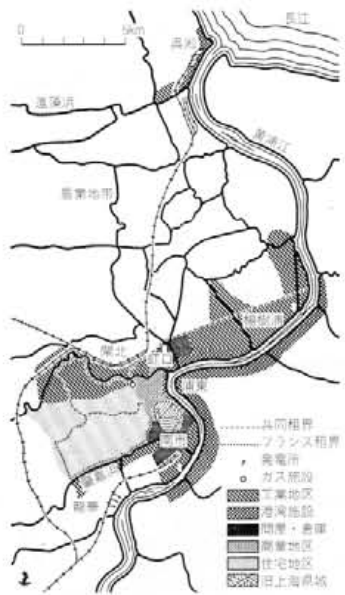
- 20 水網都市
- 30 理想都市
- 48 庭園と都市
- 58 南洋中国人街とチャイナタウン
- 72 都市の改造
- 90 田園都市
- 106 提案都市
- 126 都市の記譜化

主要都市位置図

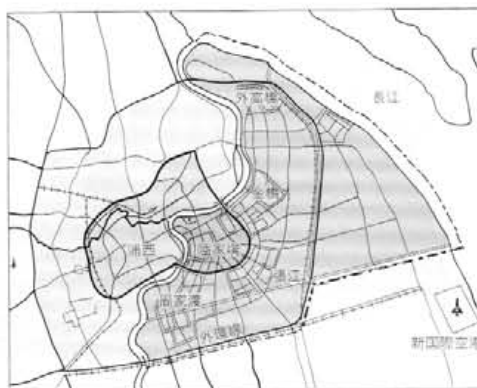
- 140 アジア
- 142 ヨーロッパ
- 144 アフリカ・オーストラリア・アメリカ

都市比較年表

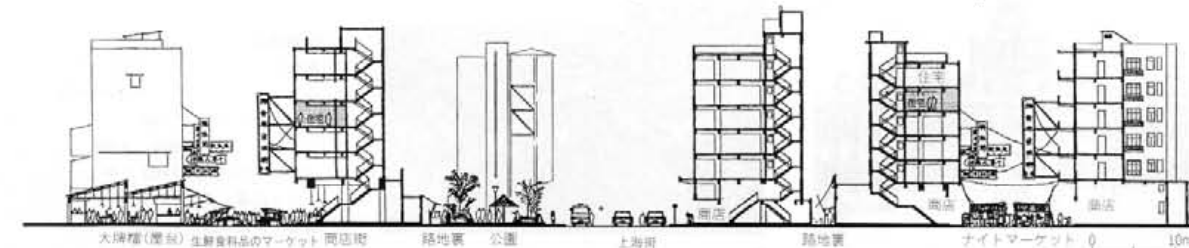
- 146 アジア編
- 152 アフリカ・ヨーロッパ・アメリカ・オセアニア編
- 279 参考文献リスト
- 290 コラム図版出典
- 291 索引

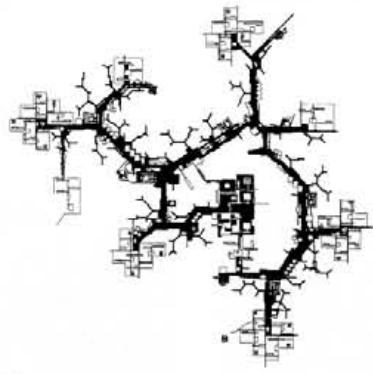
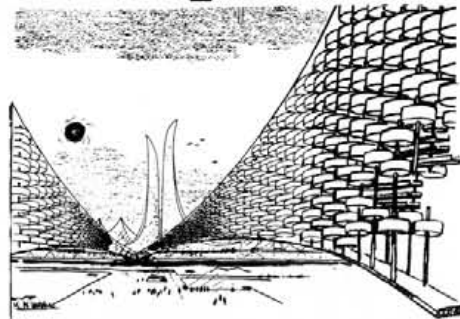
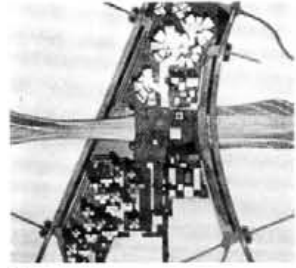
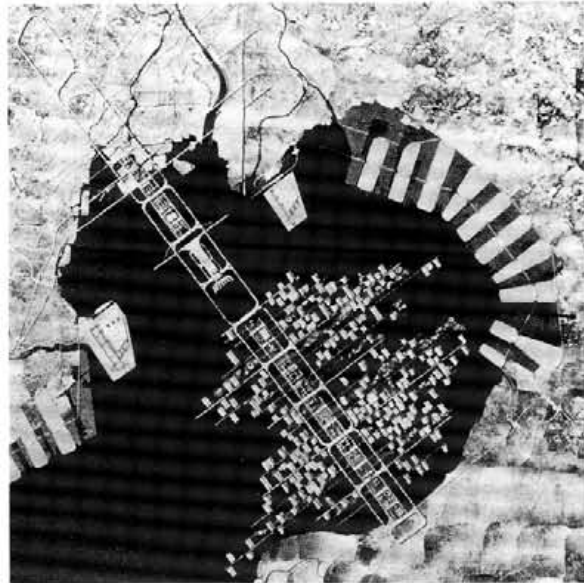


- 13 上海 土地利用の模式図 / 1936
- 14 上海 土地売買価格分布図 / 1926
- 15 上海 バンドの景観 / 1860年代(上), 1940年代(下)
- 16 上海 南京路 / 1925
- 17 上海 里弄住宅 / 1930年代
- 18 大上海都市計画 [1930立案]
- 19 上海 浦東の都市計画 / 1990

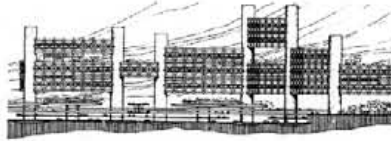


- 1 香港島北岸の景観 / 20世紀初頭
- 2 現在の香港島北岸の高層建築群
- 3 香港の埋め立て地の変遷
- 4, 5 ニュータウンの造成 (沙田)
- 6, 7 九龍城 全景と断面図 / 1986
- 8 ショップハウスの町並み (クウィーンズロード) / 1963
- 9 九龍 油蔴地地区の町並みとストリートマーケット / 1963
- 10 九龍 油蔴地地区の断面図





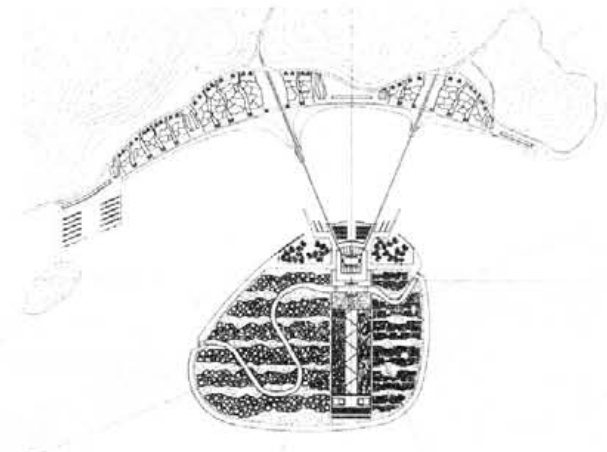
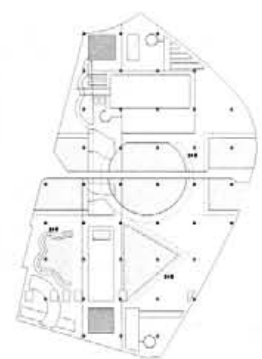
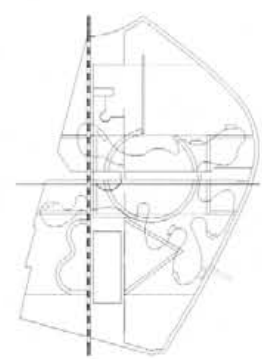
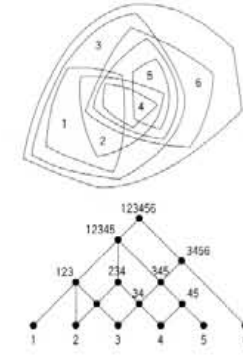
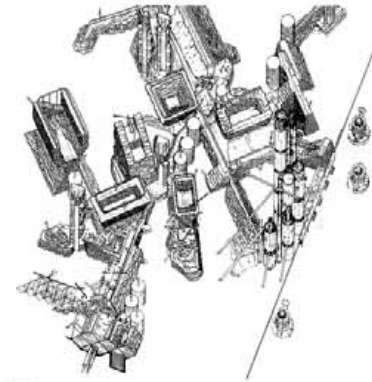
- 1 東京計画 1960, 丹下研究室 [1960]
- 2 群造形・新宿地区計画案, 大高正人・横文彦 [1960]
- 3 東京計画 1961・ヘリックス計画, 黒川紀章 [1961]
- 4 海上都市 1958, 菊竹清訓 [1958]
- 5 ベルリン計画, ベーター・スミッソン/1958
- 6 トゥルーズ新都市計画, ビーター・ワッツ・ジョルジュ・キャンジリス [1961]
- 7 空中都市, 磯崎新・森村道美・曾根幸一 [1960]



戦後の半世紀のなかで都市に対する提案活動が最も集中したのは60年代の初頭で、その発端のひとつはジェーン・ジェコブスの『アメリカ大都市の生と死』(1957)にあった。ここでは近代都市計画、とりわけCIAMに代表される開発の形式が社会的な荒唐をもたらししていることが指摘された。これに最も強く反応したのは1954年にヨーロッパで結成されたTEAM 10の活動であろう。成長のパターン、モビリティ、クラスター、連帯性、一体性などをキーワードにした彼らの都市理論は、後にベルリンの再開発コンペ(1962, 5)で三等となるビーター・スミッソンの提案などによって世界の注目を集めるに至っていた。シャドリア・ワッツ(1923~)とジョルジュ・キャンジリス(1913~)による『トゥルーズ新都市計画』(1961, 6)やイギリス『フックニュータウン』(1961)が発表される一方で、わが国で

は丹下研究室による『東京計画1960』(1960, 1)やこのプロジェクトと前後して結成されたメタポリズムの『群造形』(1960, 2)とそのメンバーから数々の提案が描かれている。黒川紀章の『ヘリックス計画』(1961, 3)菊竹清訓の『海上都市1958』(1958, 4)メタポリズムとはやや異なるスタンスを維持していた磯崎新らの『空中都市』(1960, 7)などである。これらに共通するのは時間のなかで成長していく都市のインフラストラクチャー、とりわけ交通に関する諸要素の再編を主題とするものが多かったが、それらは究極的には樹木の幹と枝による組織化を強制するものでもあった。新幹線が実現し車が普及していった時代である。しかしこうした構想はクリストファー・アレクサンダー(1936~)の『都市は樹ではない』(1965)と題された小論文によって批判されることになる。彼は都市が機械のような単一

目的をもつ部品集合体ではなく、多元で多義的な要素の統合体であることを明快な論理で説明している。そこから導かれたキーワードが『ツリー(樹)』ではなく『セミラチス』と呼ぶ関係である11。この言葉は10年の後、哲学者のジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが使った非序列的な関係『リゾーム』に通じている。60年代は交通と同時に情報時代の幕開けの時期でもあった。都市観は線的なものから生態的なものへ、さらに不定形より流動的なものへとシフトしていた。TEAM 10の次世代で60年代をビートルズのように駆け抜けたアーキグラムの提案はビーター・クックの『プラグインシティ』(1964, 8)からロン・ヘロンの『ウォーキングシティ』(1967)『インスタントシティ』(1968)を経て、植物と機械とが奇妙に混交する提案に変質していく。同時代のスーパースタジオの『コンチュニユアス・モニュ



- 8 プラグインシティ, アーキグラム [1964]
- 9 コンチュニユアス・モニュメント, スーパースタジオ [1969]
- 10 囚われの地球を持つ都市, レム・コールハース・OMA [1972]
- 11 セミラチス『都市は樹ではない』, クリストファー・アレクサンダー
- 12 ラ・ヴィレット公園コンペ案, ベルナルド・ツェミ [1982]
- 13 海市, 磯崎新 [1996]

メント』(1969, 9)は建築が情報を主題にしつつあることを強調したものと位置付けることができよう。彼らは開かれたバーチャルな、眼には見えない情報網のもつ環境との共生を模索しはじめていたのである。70年代になると都市を提案する動きは全くなかった。労働者や学生の社会的反乱、またわが国でいえばオイルショックを契機として、われわれを支えてきた社会や文化の制限の枠組みを根底から問い直す作業が始められた。近代の合理一辺倒に対する疑念、また工業化や都市化、技術革新や開発に対する反発にも通ずるものであった。反論や批判を契機に都市論は中心から地方へ、開発から保存へ、さらに市民参加の街づくりへと広がっていった。70年代の末になるとアメリカの西海岸を起点に社会評論を著したトム・ウルフの『ラスベガス』(1968)から端を発したロバート・ヴェンチャーリ(1925~)の『ラスベガスから学ぶもの』(1977)と『建築の多様性と対立性』(1977)が情報時代の建築に大きな衝撃を与えた。純粋よりも混成の、明快であるより曖昧で多義的であろうとする建築論は同時に都市建築の情報媒体としての側面にも言及するものであった。しかしこうした傾斜に傾きすぎると著されたコーリン・ロウの『コラージュシティ』(1980)は近代建築運動のなかで見失われがちであったヨーロッパの量塊的な街並みの中での都市建築について、後にコンテクスチュアリズムと呼ばれるに至る場所の都市論をとりあげている。またここから都市を機能としてではなく不変な存在として捉えるアルド・ロッシ(1931~97)の『類推的都市』(1976)や、ロブ・クリエ(1938~)やレオン・クリエ(1946~)の都市建築のタイポロジーの研究といった視点も育まれたといえるだろう。これらの活動は共

に都市の解読を飛躍的に豊かなものにしたが具体的な都市像を提案したものではない。新しい世紀を間近にした今日、情報と技術の複合的な社会のなかで、都市は非線形的で流動的な状態のなかであり、リアルなものに対するバーチャルなものへの注視や、ものに対する出来事的重要性などはレム・コールハース(1944~)やベルナルド・ツェミ(1944~)の提案にうかがえることである10, 12。磯崎新(1931~)が提案した中国の『海市』(1996, 13)は遠くヴェネツィアを下敷きにしたものであるが、ランダムに発生する諸要求をコンピューターシミュレーションで対応し、生活者をまきこんだ自然発生的な形態を持つ都市生成のプログラムが目論まれている。

に都市の解読を飛躍的に豊かなものにしたが具体的な都市像を提案したものではない。新しい世紀を間近にした今日、情報と技術の複合的な社会のなかで、都市は非線形的で流動的な状態のなかであり、リアルなものに対するバーチャルなものへの注視や、ものに対する出来事的重要性などはレム・コールハース(1944~)やベルナルド・ツェミ(1944~)の提案にうかがえることである10, 12。磯崎新(1931~)が提案した中国の『海市』(1996, 13)は遠くヴェネツィアを下敷きにしたものであるが、ランダムに発生する諸要求をコンピューターシミュレーションで対応し、生活者をまきこんだ自然発生的な形態を持つ都市生成のプログラムが目論まれている。

41-7. 8

漢口／Hankou

武漢は歴史の古い都市で、漢水、長江が合流するところに位置し、川を隔てて鼎立する武昌、漢口、漢陽の3鎮によって構成されている。1861年イギリスは漢口の既存の商業地区の東端、長江沿いに租界を開き、その後ドイツ(1895)、ロシア、フランス(1896)、日本(1898)がそれぞれ漢口に租界をつくった。〔41-7〕の地図はオーストラリアの建築家J. スメドレイ J. Smedley(1841～1903)が作ったもので、19世紀漢口租界の最も詳細な地図である。早期の租界建設は始めから計画があった。租界には両線道路を開き、全敷地を79区画とした。75～79番をイギリス領事館の用地、73～74番を教会の用地として、他の敷地を売り出し、その収入は租界の都市基盤の建設費用に充当した。〔41-8〕は初期漢口租界の光景を表している。川沿いに広いバンドが造られ、居留民は借りた敷地を塙で囲い、院落を形成する。院落の中に建物を建て、空いている所に庭木を植えている。建物は、ほとんど木と煉瓦による2階建て、すべてヴェランダ植民地様式Colonial Veranda Styleであった。

- 東京大学生産技術研究所所蔵〔40-7〕
- John Thomson “China and Its People in Early Photographs” Dover Publications, Inc. 1982, New York〔40-8〕

41-9

天津／Tianjin

天津は北京の南東約110km、大沽海口を距る約70km、南北運河、海河など五つの川の合流点で、明・清二代の王朝期に栄え、1860年北京条約により開港させられた。その後イギリス、フランスなど9カ国の租界は海河に沿って次々と奥深く展開した。その総面積は天津旧都城の8倍にも達し、天津の金融、商業の中心も租界に移った。これに対抗するため、袁世凱は「洋務運動」の一部として、旧城の北側、海河の北岸に皇城の4倍の広さをもつ新設区域をつくった。このために天津は旧皇城及び周辺(南市)、租界と新開地の三つの地区から構成され、海河の兩岸にまたがっている。

- 『天津通志・租界』天津社会科学院出版社,1996

■上海

41-10

上海 租界地図／Shanghai／1855

1845年、上海のイギリス租界が上海県城外、北部の郊外に成立した。この時期の上海県城はすでに約550年の歴史があり、交通便利の海運、河運によって、中国全土的な物流の一大拠点として繁栄していた。地図の左の円形の城郭は上海県城、右がイギリス租界、県城とイギリス租界に挟まれた部分がフランス租界である。この地図は開港初期の上海都市構造の特徴を表している。一つは西洋人の租界と中国人の伝統城郭都市としての上海県城を共存することである。もう一つは黄浦江という河に面してつくられた租界はバンドを中心に、住、商、倉庫などの機能が未分化であり、単一の貿易型機能をもつことである。

- 『上海租界地図』横浜開港資料館所蔵

41-11

上海 租界の拡張の過程

租界はたびたび拡張し、その拡張は黄浦江沿いの狭い地段から次第に内陸部へ発展していく。1845年に最初に画定したイギリス租界の面積はわずか830畝であったが、1848年第一次拡大によって2,820畝に広まった。1863年アメリカ租界と合併し、共同租界が成立した。この共同租界は1899年の拡張を

経て、1915年の統計によると面積は54,793畝に達した。一方、1849年のフランス租界は986畝で、3回の拡張によって面積も15,149畝に達した。この図のように西洋人租界は上海市街地の大半を占め、中国人の旧県城を取り込んだ。

- 村松伸『上海・都市と建築』パルコ出版,1991より作成

41-12

上海 越界道路の発展の様式図

租界拡大の方法は、租界自身の拡大を除いて、もう一つある。それは越界道路を張り巡らし、その両側を租界に類した地域とする方法である。太平天国軍の攻撃を防御するため、1860～62年までに造られた軍用道路(静安寺路をはじめ、ジェスフィールド路、徐家匯路、呉淞路など)が越界道路の始まりである。図の網点部分は1930年代段階での越界道路区域、その規模は租界に匹敵するほどであった。

- 村松伸『上海・都市と建築』パルコ出版,1991より作成

42-13

上海 土地利用の様式図／1936

上海は、開港初期、租界面積は狭く、都市機能は未分化であった。しかし19世紀末から租界の拡大とともに、旧県城を取り込んで、次第に上海の都市構造も大きく変わりつつあった。この利用図を見ると中区は商業、西区、閘北と虹口地区は住宅、また黄浦江の沿岸は港湾施設、蘇州河兩岸と楊樹浦は工業区、さらに上海県城の南側は問屋と倉庫地区で、この時代の上海は土地利用が機能によってはっきり区分されていたことがわかる。

- 村松伸『上海・都市と建築』パルコ出版,1991

42-14

上海 土地売買価格分布図／1926

上海は都市の繁栄とともに、土地の価格も高騰する一方であった。租界開設当初、租界内すべての土地は敷金15両、年賃金は1.5両であった。第一次世界大戦ごろから1930年代の始めまでは、上海は、第一次世界大戦の景気にのった「黄金時代」にあったといえる。この時期の土地売買価格分布図を見ると上海の繁栄がわかる。1926年南京路とバンド地区の地価はすでに20万両に達して、開港当時の13万倍にもなった。また価格の分布は不均等で、南京路とバンドを結ぶT型の中心地域から西への郊外にいくに従って安価になっていく。

- ・“ The China Weekly Review ” 1926.12

42-15

上海 バンドの景観

上海租界の開発はまず黄浦江という川に沿っての堤防工事、すなわちバンドから始まった。実はこの方法はイギリスの東南アジア植民地経営の経験として上海の租界に導入された。その後バンドは常に時代のランドマークとして租界あるいは上海の繁栄を示している。上図はバンド初期の風景である。建物はいずれも2～3階建てヴェランダ植民地様式を採用していた。下図は1940年代のバンドで、建物はほとんど1920年代～30年代の間に建て替わったものである。当時、東洋最大の都市上海で自国の富と権力を誇示するため、列強諸国の建築家は、自国の最先端である折衷主義の建築様式を上海に持ち込んだ。

- 香港芸術館編『十八及十九世紀中国沿海商埠風貌』香港市政局、香港、1987〔42-15、上〕
- ・上海居留民団編『上海居留民団三五周年記念誌』1942〔42-15、下〕

42-16

上海 南京路

1847年南京路はバンドと競馬場を結ぶ道路として建設され、

その後、1860年に造られた静安寺路とつながって上海の東西地区を結ぶ動脈となった。19世紀末にはバンドの一部を除けば中国人商店が殷賑を極め、租界一の目抜き通りであった。第一次世界大戦前後、上海は戦争の景気に乗って、南京路には海外の華僑資本と国内民族資本が次々と進出し、完全に近代化された。この写真はちょうどこの時期の南京路で、道路中央に新型の路面電車が走り、道路両側にはネオ・バロックの尖塔が建ち、覇を競った百貨店や近代ビルが並び、上海最大の繁華街の様子を示している。

- 横浜開港資料普及協会『横浜と上海 二つの開港都市の近代』横浜開港資料館,1993

42-17

上海 里弄住宅／1930年代

里弄は19世紀半ば上海に現れた特異な都市型住宅である。基本的な空間処理は中国江南地区の伝統民家を踏襲して、その配置は、ヨーロッパの都市型住宅を真似たものであった。上海で形成されたこの里弄はその後天津、漢口などの租界にも伝播していった。里弄の種類は旧石庫門里弄、新石庫門里弄、新式里弄などがある。〔42-17〕は旧競馬場の近くにある「大慶里」という里弄で、1915年に建設され、新石庫門里弄に属する。

- ・上海図書館他編『海上早踪系列：南京路』上海集郵總公司,1996

42-18

大上海都市計画〔1930立案〕

1930年国民党の上海市政府は、上海の中心を中国人の手に奪回するため、孫文の「建国方略」の計画を依拠して「大上海都市計画」を中国人建築家の手によって立案した。その基本構想は環状路による租界の包囲と、呉淞に港を築き、租界との間に新都市を建設することである。新都市は整然と計画され、道路網は放射状に設計され、その中心に市政府を置いた。欧米バロック都市計画の影響が見える。この計画は一部は完成したが、その後日中戦争の影響のため実現しなかった。

- ・上海市政府秘書処編『上海市政概要』上海、1934

42-19

上海 浦東の都市計画／Pudong／1990

中国の「改革開放」政策のもとに、50年間化石のようになっていた上海は1990年代から大きく変わりつつある。1990年上海はアジアの経済センターをめざし、新しい都市計画が制定された。そのうち、特に注目されているのは、黄浦江の向こう側でつくられている副都心浦東である。浦東は五つの地区に分けられ、陸家嘴(金融、貿易、文化地区。浦東の中心)、外高橋(港口、工業地区)、金橋(輸出加工業地区)、周家渡(ハイテク技術開発区)と張江(教育、研究地区)である。浦東は内環線と外環線より浦西(現在の市街地)とつながり、新しい国際空港も建設中である。

- ・上海市経済信息中心編『上海浦東新区発展前景与投资政策』上海科学技術出版社

■香港

43-1. 2

香港島北岸の景観／Hong Kong

香港の都市の風景を代表するもののひとつがヴィクトリア湾に沿った香港島北岸の景観であり、この風景の変化こそが香港の急速な発展の象徴でもある。20世紀初頭、美しいプラヤを持つ小さなイギリス植民都市・香港には総延長1万フィートの新プラヤに沿ってネオ・バロックスタイルやヴィクトリアンスタイルの建築が整然と建ち並んだ。その後、度重なる埋め立て

によってトラム(市電)が走る旧海岸線は、結果的に最大で2km以上内陸となった。1980年代後半からは中環周辺だけであったCBD(Central Business District)が上環から銅鑼灣まで連続的に拡大し、それと合わせた高層建築の林立によって、開発時期の異なる街区による重層的な景観が生み出されている。

- Tong Cheuk Man, David P. M. Toong, Alan S. K. Cheung, Mo Yu Kai ed. “A Selective Collections of Hong Kong Postcards” Joint Publishing (HK.)〔43-1〕
- ・『キクカワプロフェッショナルガイド HONG KONG』菊川工業株式会社,1995〔43-2〕

43- 3

香港の埋め立て地の変遷

香港の都市形成の上で、埋め立ては重要なキーワードである。香港総面積約1,100km²のうち、市街化区域は約12％であるが、これまでの総埋め立て面積は香港島が割譲されて以来、約5,400ヘクタール、すなわち市街化区域の約40％にも達する。ヴィクトリア湾を挟んで香港島北側および九龍半島で行われていた埋め立ては時代とともに郊外・新界へと拡張されている。現在、PADS(香港新空港・港湾開発プロジェクト)およびメトロプランといった新しい都市改造のために、これまでの約150年間に行われた埋め立ての約60％にあたる3,160ヘクタールの埋め立てが行われており、香港の中心はランタオ島を含む西側に大きくシフトしようとしている。

43-4. 5

ニュータウンの造成

1972年、スクウォッター対策および過密状態にある市街地の飽和といった背景から10年間で150万人に対して住宅を供給するプログラムが示され、新界の六つのニュータウン、全灣、沙田、屯門、元朗、大埔、粉嶺が指定された。その中でも沙田は1976年以来、人口3万7,000の集落から20年余りで約60万人の都市に変貌した香港の代表的なニュータウンである。その構成は交通ターミナルとショッピングセンターを中心にペダストリアンデッキで高層住宅群、特にハウジングオーソリテイによって供給される公共住宅群とを結ぶものである。今日、ニュータウンおよび公共住宅は香港約600万人の半分以上を抱えるまでに至っている。

- ・Hong Kong Government〔43-4〕
- ・Hong Kong Government Territory Development Department“ 20 years of new town development”〔43-5〕

43- 6. 7

九龍城／Kowloon Walled City

アヘン戦争後、イギリスが清朝から香港島と九龍半島を割譲した際、九龍城砦のみその対象から除外された。香港において治外法権的な場所として大量の難民を抱え込みながら、1870年代半ばには5万人が住んでいたといわれるまでにアドホックな都市を形成した。その空間構成は低層部の工場・店舗など、上層部の住居が高密度に集約されたものであり、この概念は、そのまま都市・香港の特徴でもある。九龍城は1993年解体され、1996年には一部を歴史的建造物として残した中国式庭園に生まれ変わっている。スラムとして位置付けられ、公園となった九龍城の変容は、ニュータウン建設の背後に隠れたもう一つの歴史の縮図でもある。

- ・Hong Kong Mapping Office〔43-6〕
- ・九龍城探検録〔43-7〕

43- 8

ショップハウスの町並み（クウィーンズロード）

かつて香港の中国人街では、東南アジアのチャイナタウンに